



デザインした「バレーノ」の後部ライトを指差す中尾ジゼレさん。生み出したライトは「子どもみたい」な存在だという＝浜松市南区増楽町のススキ歴史館で

母国との架け橋 夢描く

浜松の日系デザイナー・中尾さん

新開国 2019

外国人就労の拡大に向けた改正入管難民法が一日、施行された。幼少の頃に両親と来日した日系ブラジル人の中尾ジゼレさん(26)＝浜松市南区＝は、浜松で念願のデザイナー職をつかんだ。新たな在留資格には、家族の帯同が可能な資格もある。「親が子とよく話し合っ、子どもの夢がかなう環境づくりを」と、自身の体験を踏まえて語った。

中尾さんは二〇一二年、二つの国がつながったろう脊、ススキに入社。「アル、れしい」と夢を膨らませる。

トの造形を担当してきた。「いつか自分がデザインに、関わった車が母国で走り、

国内指定エリア送料無料
0120-347475.com

一九九一年、二歳の時に浜松へ。両親は市内の町工場で働いた。中尾さんは小学五年の時、ポルトガル語の読み書きもままならない中、両親の帰国に備えてブラジル人学校に転校。結局、家族で日本に残ることが濃厚となった中学三年の時、高校受験に備えて再び公立中に編入した。

カタカナの名前をからかわれたときも、転校を繰り返したときも、心が折れそうになったときも、支えられたのはイラストとマンガ。「好きなことで手に職をつけたい」とデザイナーへの憧れが芽生えた。先生に「難しい」と言われていた浜松工業高デザイン科に合格。静岡文化芸術大に進み、コンピュータ利用設計システム(CAD)を学んで道を開いた。

新設された「特定技能」という在留資格のうち、より高度な技能レベルが必要な「特定技能2号」では、家族の帯同も可能で、幼少期を日本で過ごす子どもたちも増えそうだ。

中尾さんは「日本に定住するのか、母国に戻るのか。早い段階で子どもと話し合い、子どもの夢がかないうちの環境を整えてあげることが重要」と強調する。子どもたちにも「自分がどういう夢を持ってどこで生きていきたいか、思っているのか、きちんと親に伝えることが大事」と助言した。